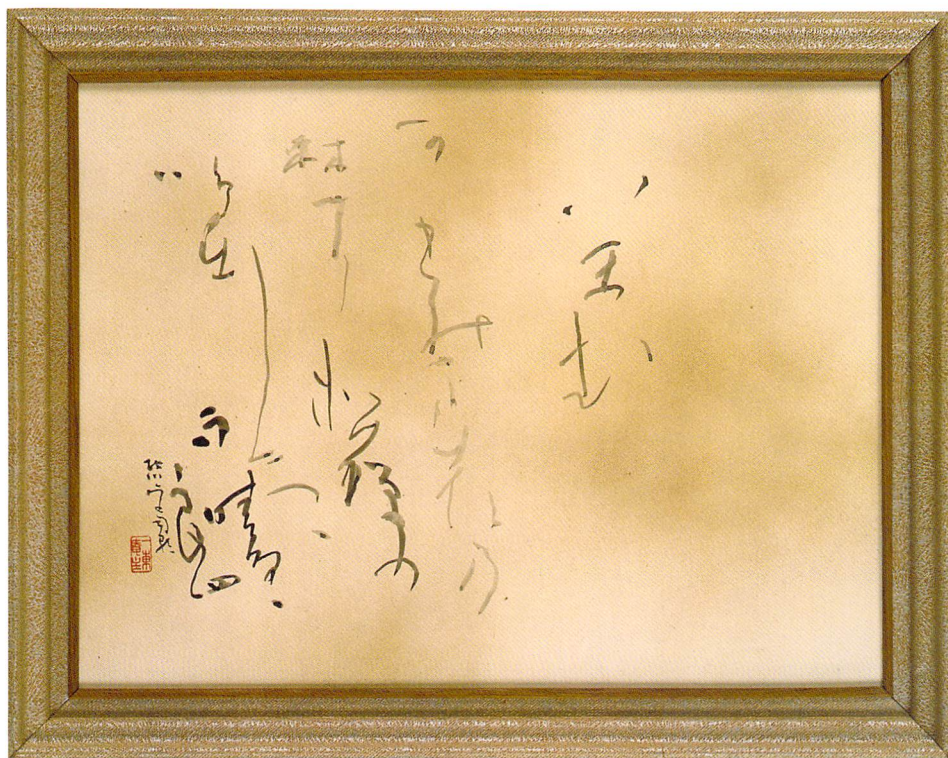


作品とは構成の異名



萬
まむ可思能万部乃
かひのまつ林に松蟬の鳴出しにつ、雨晴る、らし
本紙 36・5×49 cm (額・神戸市立博物館蔵)

北川宮司歌

昭和三十七年(一九六二)三月刊『かなー初歩から作品まで』の実習篇第六章「構成の本文は、同三十五年八月刊『書芸公論』二三五号(臨時増刊)「横披形式の研究」所収の「横披構成について」を補訂したものです。が、いずれも「構成とは作品の異名である」と結ばれており、結論として述べておきたかつたことであることがわかります。事実、著書『かな』では「作品とは構成の異名」という第七節を追加。その第二段落末尾で「作品とは結局他人に見せるものである」と記した後、

個々の文字が、その線や形の上で、いかに充実したものであっても、無意味に列べただけでは作品にはならない。古人の書跡で意のおもむくままに書いた、いわゆる率意の書と呼ばれるものは、一見無難作に書いたように見えても、良書はその人の感覚のよさと修練の高さという裏付けがあつて書き出されたもので、決して無から有が生れて来たわけではないのである。

このように考えて来ると、構成とは制作時の精神活動をその内容として総合したものである。

と続けています(昭和三十七年初版二二二―二四頁。同四十三年増改訂三版二七―二八頁)。以下は「八、構成の実際」「九、墨法構成」「一〇、書風と構成」と具体的な各論で、『書芸公論』稿の「結び」を「一、構成の精神」の節として、冒頭に引用した二文で結ばれています。

「構成とは作品の異名」にせよ「作品とは構成の異名」にせよ、匆卒にしたためた半紙手本でさえ、多様な散らし書きを展開した龍洞の志向がよくわかる語です。「紙に二か所墨の点を打つてもらつたら、そこから散らし書きを展開できるのがプロの書家」と聞かされたことですが(小編「深山龍洞かな手本」美しく格調高い仮名を学ぶ―一九九八年、日本習字普及協会、二〇四頁)、龍洞没後三年目の命日の昭和五十八年(一九八三)五月一日、洲本市で催された偲ぶ会での席上、師・桑田笹舟も、

ある時、私に色紙の所望がありました。先生が「桑田先生に書いてほしいところの書き出しに小さく墨で点を打っておきなさい」とおっしゃったところ、皆右上に点を打ってきた。それを見ていた先生が後で「あなたたちは習っているから、いつも自分の書き始めるところに打ってくる。発想がいけないんだ。書家はどんな展開でもできるものを」とおこられた。私が色紙に書いた後で助かりましたよ。(笑)先生にもこわい二面があつたんですね。皆さん、どうか先生の発想の鋭さを大事に受け継いで下さい。

と述懐したことでした(同年七月刊本誌七六号。偲ぶ会については本稿3参照)。

上掲は、兵庫県神社庁長を務めた神戸市垂水区・海神社の宮司で、歌人でもあつた北川利次(一九〇七―八三)が昭和四十三年九月に上梓した『歌集さわらび』(やどりぎ叢書第六集、やどりぎ短歌会)所収の「松蟬」と題する歌の二首を懐紙に書いたものです。龍洞が海神社で教場を開き、また北川宮司が昭和四十六年に上梓した式辞祝辞挨拶集『平磯』の題字を揮毫するなど、親交がありました。なお本作品は、作品番号34として所載される『神戸市立博物館収蔵作品集』(一九九二年)では昭和四十九年作としましたが、同四十六年の第二十二回「楽書芸院展」(六月三十日から七月四日まで)出品作です。

ともあれ、本紙右半の余白を広くとり、漢字「松蟬」「雨晴」や草仮名「良四」の交用、墨法、落款も含め左下部で密度を高めた構成は、まさに「作品とは構成の異名」そのものです。本紙周りを直接額縁で囲んだのも、意図するところがあつたでしょう。

(筑波大学教授・森岡 隆)